



国立国会図書館

滑稽繪姿合 208-8



ガラス使用



滑稽繪姿合 全

208  
8



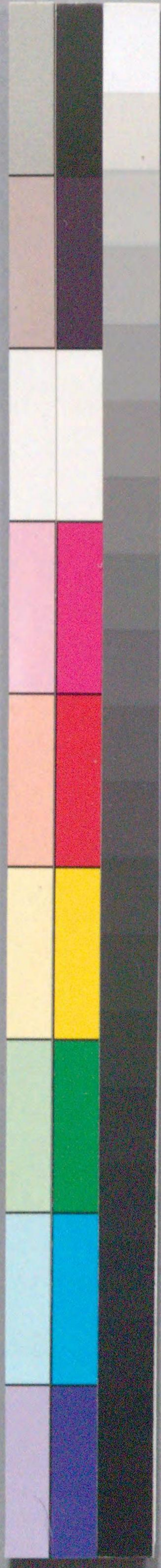
朝櫻樓國芳狂画

柳下亭種員戲作

あつせ  
全部  
大保甲辰  
孟廠幾存



耕書堂





故人京傳翁の画兄弟の寛政六年に新版  
のまの耕書堂のまふ大當りも卒余年の以  
 あづの世の人今にりてを守他の作忘も羨す  
 七段目のあつあつと鏡小替の延が  
 せれが遺るを拾んと先一力で酒房ふむ  
 思は信田の紙その「葛葉」の「看版書」を  
 立平なる藝盡し「一寸」の「軍書讀」  
 小張扇を斯の「閻魔王」様とて

繪姿合 自序

歌川國芳狂画



葛重 上梓

滑 稽 合 繪 姿 女 一 全 部 卷

柳下多種貞武作





ぐんま、コイハ、あつらひ大仕掛の「屋敷氣樓」の「焼鈴餅」  
 花よ、擬ぐ「奥道者」が吉野辺の落がき、少櫻  
 本の「備後二郎」あつらひ照と釣燈爐の月  
 形よ、因る「落鳳」み、取合せる「笠招牌」をつる、あす  
 たる命、同大夫様でも、歩率でも、御恩よ、重いと、軽いの  
 へ「挑灯鐘」ハ、空樽買」と、迄い、あつらひ、扱「船工」ハ、仁  
 田郎、あ、身中、虫と、あ、是、由良、助が、と、と、あ、り、足、を  
 戴く、銷さ、る、形、の、あ、は、似、る、「鑿鑿」と、對よ、と、侍、の、ハ  
 野中、は、「地藏尊」九大夫、松浦、小夜姫、あ、れ、「初平使」  
 が、存、る、羊、と、化、その、お、つ、く、由、縁、の、有、「紙屑拾」を、兄、弟  
 と、あ、つ、く、思、ひ、月、の、入、る、山、科、あ、る、是、も、又、都、よ、近、江、市、原  
 の、「鬼童丸」の、見、え、る、少、青、海、苔、貫、つ、れ、小、打、太、神、樂  
 や、「旅神樂」と、あ、ま、ま、で、丁、度、十、番、ハ、え、ら、あ、ら、あ、と、稲、成、て、も  
 名、さ、得、れ、ぬ、新、作、者、ハ、譬、言、喻、寺、屋、平、右、衛、門、足、輕、風、情、と  
 後、見、捨、る、う、も、く、小、説、家、の、連、判、小、脚、加、へ、あ、れ、て、い、い、ま、あ、ら、  
 備、ふ、筋、ひ、た、て、ま、あ、ら、と、段、切、小、出、る、三、人、侍、等、く、た、ん、く  
 あ、や、ま、り、入、り、あ、せ、序、入、る、

天保十五甲 辰孟陬發行

柳下亭種員識











一番兄 葛乃葉

夫を保名といひ妻をらぶどの養と呼ぶさねがう  
青物屋の棚ざうー小似ら安部野より死  
機織虫あきもあつてもせぬ申やう願頭の  
庄司平野干と見しとて心づくは茂林ぬ  
いあらも信田の森の古栖へ帰るは是天縁た盡る  
所今更誰とれうみらどのとん

一番弟 招牌書

看版ふ偽があらも内いもふふ及とい画かたん

を見と落をまりあつてととととせん志あんと  
印く假名招牌の讀らひる牙牌方口上中途  
止る輕業の經ころ客人を踏倒して居るが足力  
の牌子かんえんぐらて賣て為舞が初午の太鼓屋  
かへ愛小招牌書が書躰を見るふ大師道風  
筆勢をもあつて嵯峨瀧本の今様もあつた  
あつて雪の白さゆ餅の黄あつても墨くらぐとと  
ひる並木れ鐘木屋と以鼻祖ととる能太く書ね目  
みたりぬと如何様者り丸成とい付あり









二番兄 焼蛤蚌

なほ夕あやり十五夜ごしやの時とき惠めぐみ見みて刺さる初はつ午ごの絡らのらく愚ぐ智ちとらひ蚌はまがひ離はな棚たなああがるるをを見みてて猿さる蚌はまがひ羊やぎ皮かわむ事こと精せい靈れい會かいの神かみ道みち者ものふ似にたりら雀すずめの海うみ中ちゆうへ入いりて蛤はまがひとあるあるるともも鶴つるとらひ兎うさぎ角かく中ちゆうが悪あくしし寧ねい眼がん薬やくの入い物ものとらるるて終ま了りをを踏ふ臺たいの穴あな取とりともも梳と油あぶらの器うつわとらるるて鼠ねずみ乃なり為なるる夕あやの海うみ事ことかかるる也なり。

二番弟 辰虫氣樓

天竺てんぢくああてて大だい日にち經けい小せう乾けん闍せつ婆ば城じやうとと是これをを説まを唐たう土ど晋しんの

伏ふく琛しんが三さん齋さい略りやく記き海かい市しと見みええ叔しやく日にち本ほん一いつ始しまりり一いつ人ひと皇かう何なに十じゆ何なに代だいとと者もの火ひててかかるる説せついいわわりり今いまもも彌や生せいののああろろ否いな小せう越こ路ろ乃なり海かい入い現げん乃なりとと南なん谿せきが東とう遊ゆう記き一いつ載さいたりり空くう中ちゆうへへせせりり出い出で造ぞう化かのの手て細さい工く大だい仕し掛かけ木き戸こ銭せんののすすののまませせ物もの長ちやう谷こく川せんもも又また及およぶぶ塵ちんくくららむむとともも正ただままきき物ものああるる糸いとをを霞かすみ小せう隠かくれれ雲うみよよ消き看けん官くわん志しままりり小せう氣き派はいのの心こころ多おほ志しんん氣き樓ろうととをを号ごうにに何なにれれ何なにれれもも昔むかしよりより云いひ傳つたへへるる説せつををききここええ中ちゆう々々志しんんききのの物ものああるる也なり。









三番兄 辻講釋

昔は是を太平記讀今も号て講釋師街上の系と  
張扇日永くとも短くた後席の清洲の鎗為合限  
其舌の勇士の薙刀に似て水車の如く廻れども貪れ大  
敵の防ふふろく衣服の破て鎧も名ある大荒目もや  
べく又霖の龍城を千又破より猶難及見へたる其楠も  
智慧があられば南帝の為頼ともまら此講談師  
も不弁あら大路へ出て産業もまゆト嗚呼笑止  
汝がたこのねと

三番弟 閻魔王

夫閻王の前小廳場を扣え傍小秤を置あつも至て胸  
箒つろくはひ平の秤盤を持し所をまが二五十五王の同  
廊めて一五が五道の冥官の則家監甲幹る脱衣婆  
との中賈ろ送状の添罪人を引請秤目で科の直段  
と定め是を百余れ下地獄へまを血の池で曝け活で搗  
碎る時ハ大活して又元のまを思へ閻魔の紙屑屋  
の亭主小等しく罪人の還竟紙似たり此世で悪のを  
為者へ忽罪業の紙を龍小入忍ても猶慎べし

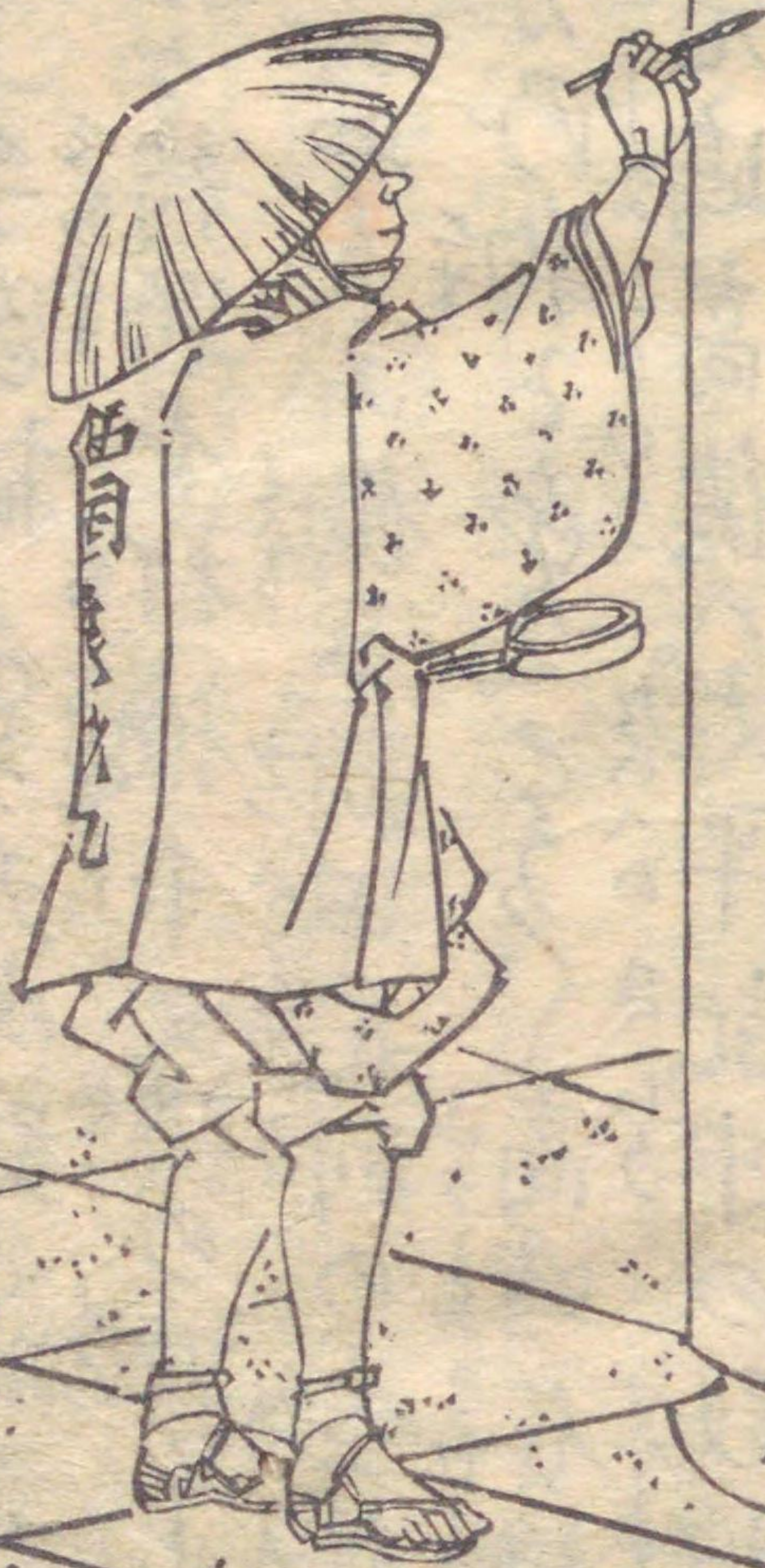


奈良七重七堂伽藍やいづろ 七廿張

天保十五年  
三月廿二日  
三月廿三日  
三月廿四日  
三月廿五日  
三月廿六日  
三月廿七日  
三月廿八日  
三月廿九日  
三月三十日

弟奥道者

于時天保十五年



四番兄  
備後三郎

天為空石殿哉

川柳点

徳ハ

筆

毛むと

のひ



「おんあつたのあつた  
うらちりこら板元うら  
りれれとまきさうら  
いそか







四番兄

備後三郎

後醍醐天皇の相摸入道が角行まらの如き筋違の  
 政道を悪くたまひて隠岐國へ入王將とありしを  
 備後三郎といふ上手な挿むが天勾踐と助言を  
 せしむる名和赤松が待駒を打楠千又破の城を  
 籠りて化飛車のやうに働きたる新田足利の金將  
 銀將がのりか味方の駒とありてさうく高時貞將  
 謀とある斯くは兒嶋高德の太平記中の段將  
 謀なほなる。

四番弟 奥道者

奥乃若六條まありとあるの泰詣人波と打有様小  
 己が園の陸金と思ひ出し金御嶽へまうづる日の座  
 王堂の光るを見て古郷の金華山を慕ふ月日小居る笑  
 もあく霞より出し白川の吉野へ来れば葉櫻とあり彼松  
 島で曾良が讀たる鶴よ身とれといふ時鳥の片置山乃  
 邊でさう旅うたひ小様寐して夜毎小替る本賃宿他  
 園の風も身ふるのまは所謂ちり連世のあさけ。ゆん  
 ぞう悪くもあさぬ支とれ。



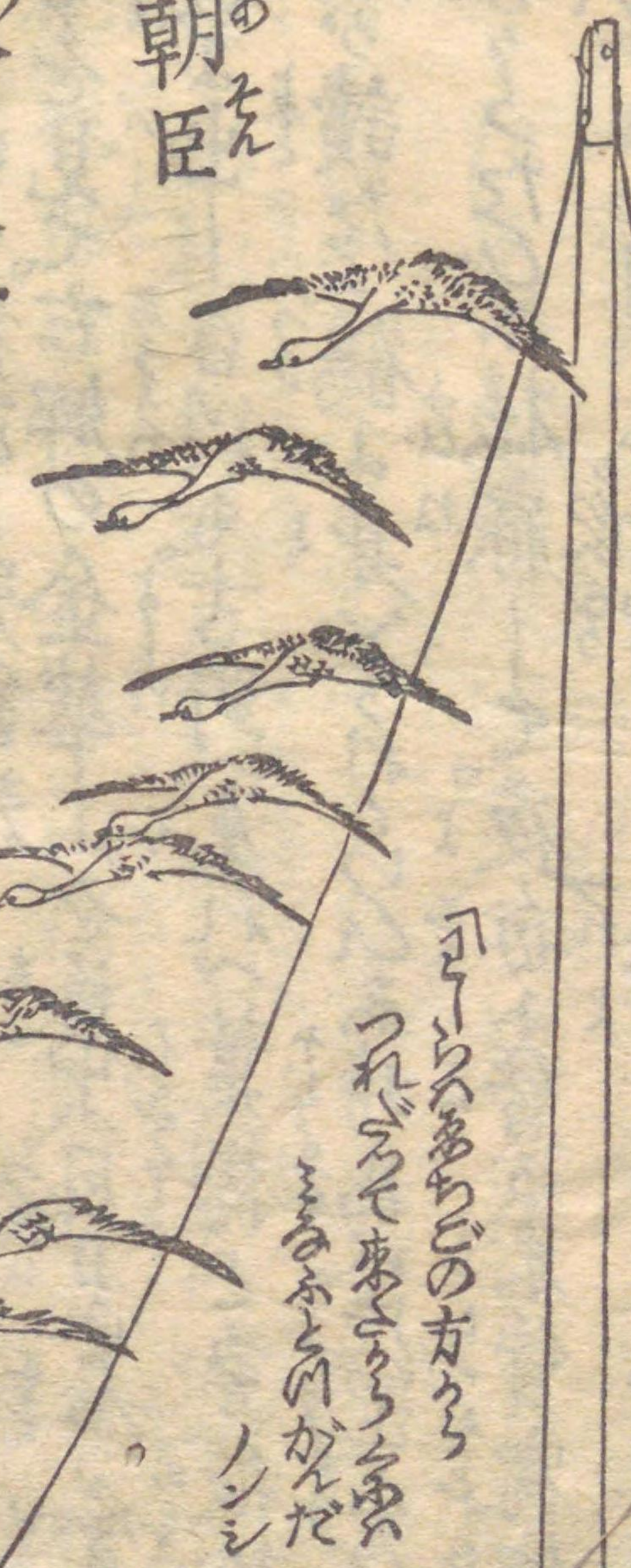
五番兄落鴈

古今集

躬恒朝臣

ちるがすこ  
まのあゆま  
いあかりの神  
今我ぢりあ  
秋まりのうし

ハ  
こらうと  
かてあ  
ま  
ひ  
か



つれづれ  
まふ  
ノシ

弟笠招牌

類柑子  
享保四年  
刊行

前  
駒形へあがる様入か  
蓮之

附  
登で見  
清十郎千後  
只尺



腫物  
この目  
だ





五番兄 落 鳳

鳳の居良時伏勢つらりか糸とく側の川柳点の悪  
らちあぐら 霏める空の層をうす墨小書玉章と産  
神主ぶが見え茶番蘇武が敵地を立茶室も  
の便宜はとげななりけれ無題の近江八景も堅田の  
鳳ふ落が来はとく景物が能由成べし

五番弟 笠 看 版

心ふかき著てうせとく知足を一の道歌清十郎の  
笠名高きく笠寺つめて熱田ふちめ笠ふ己が  
生風を書て笠森乃観音へ札と納むる坂東順禮揃の  
笠の早乙女が聲面白き田う多歌持まを風流の始と  
いひ、まのふ笠嶋あまはと大和國小笠置山あり市女  
かたへ古風ゆき二蓋がさ六紋所三度あり殿中あり  
熊谷がさ乃名は猛く小女良手と呼はゆあまは花  
のち月の暈管の小がさのいと白と雪の降日の笋笠  
は申は玉縁時雨の狂がさ此外ありき笠乃名のち  
あてまの盡難斯品々の笠を集て廿余りの積と  
いふ都の富士も編があら名あり





六番  
兄挑灯鐘

新撰犬筑波集

かたくり

持や兼

釣糸とちやうちん  
賣よ言づけて



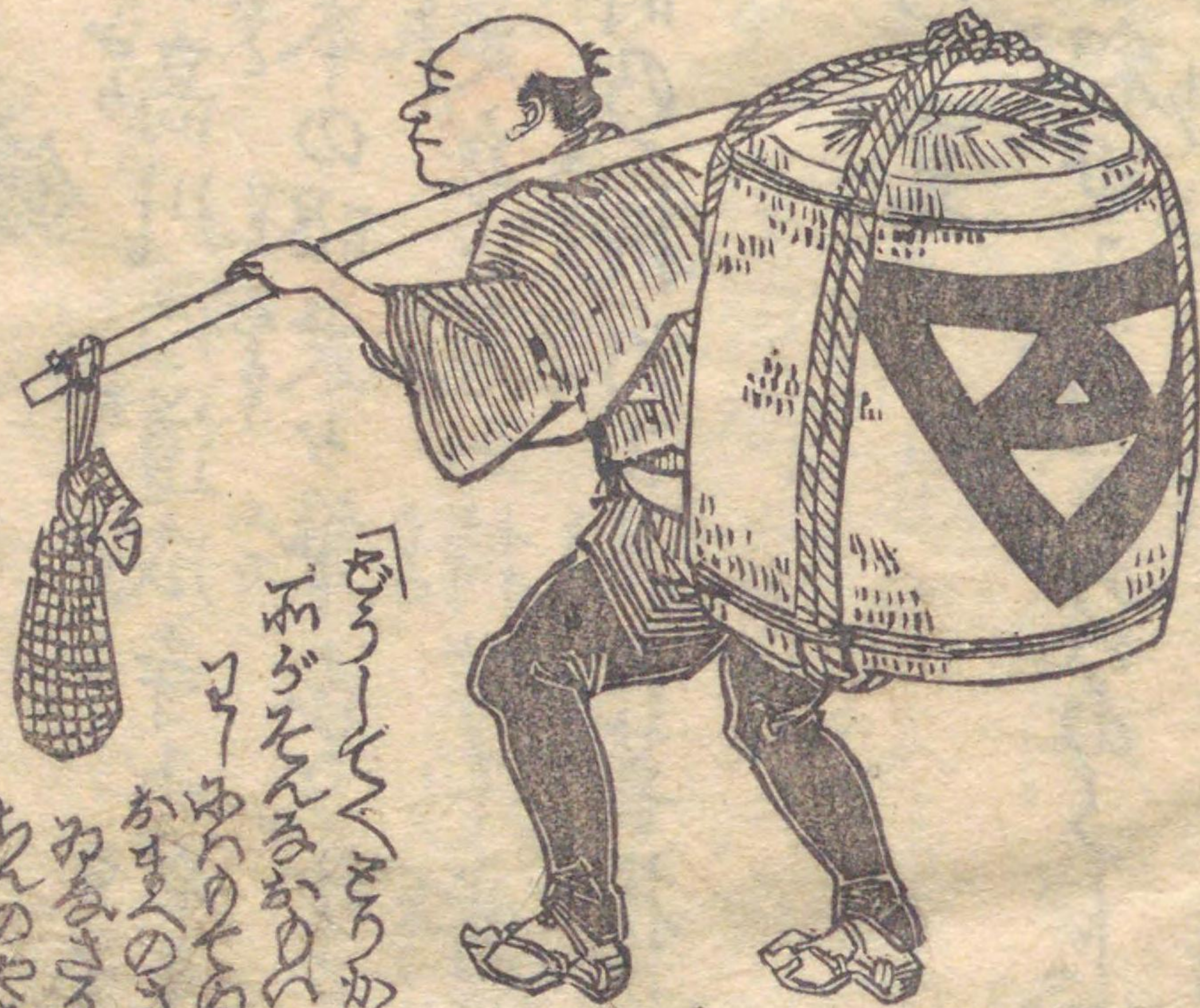
コレはたや  
あつみのうろのそ  
あれたふとぎ  
あれがぢきまひ  
とさうとさう  
うろ  
これ  
とま  
あふ  
とらひ  
まらひ  
だ

弟空樽買

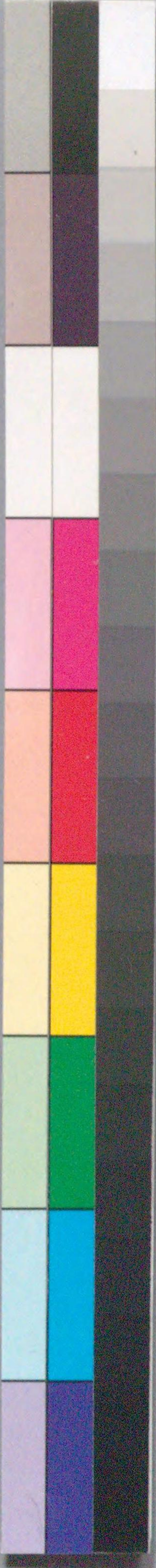
題五字

不盡縁

粘漬ノ樽



かたくり  
あつみのうろのそ  
あれたふとぎ  
あれがぢきまひ  
とさうとさう  
うろ  
これ  
とま  
あふ  
とらひ  
まらひ  
だ







六番兄 挑灯 鐘

安珍みはりか糸日高川の道成寺の名多く  
てうちん小釣鐘の籠本の昭乗が筆あり。おとち  
蛇イ化むの語是多鬼お持せし當坐乃  
狂画犯惱の火ち前の挑灯よ見え菩提の鐘  
へ北月の方あり。

六番弟 空樽買

あき樽大嘆曰かの程せよ憂いのあうと中  
酒の候時へ庫の内ふ安座し吞ほすと  
カケみ

物置へ打あまき樽買の手ふりたると其俵忽小  
生皮を剥き物乃哀れあつた摺澤庵漬乃  
入物とあは日ち練馬徳丸の在郷よはまよひ  
又淡柿を誥らとるへ須田街四日市北市中  
徘徊し。摺持主とあはめあき姿城うす鏡よ  
離且底よあよとあまよの身し思ひ出ま  
古句あそあき。

尾を那とる汝が  
とん炭あつら



七番  
兄 仁田四郎

川柳点

猪いのち又また笹ささ  
龍膽りゅうたんの  
會あひま符ふと  
たて



あれもあつ  
りいんが  
あのかける  
のでおが  
りれぬう  
なんまの  
あつ  
やうサ

第 船工

船造

梶かぢ子こ乃の  
あつ



あつ  
吉田登の  
あつ  
あつ  
あつ







七番兄 仁田四郎

建久四年 皐月のあろ 頼朝富士の御将の時 大さ  
あ猪があをまを出し 誰れとをまふさるしを  
仁田四郎が為留たり 扱其野猪の四日市へ賣る  
又彌町へ送りけん行されの作者もあす 其あろ  
曾我の兄弟が御寮の将屋へ切入し 城忠常は  
つと十郎の足を斬て討留むる 先退治たの山  
鯨後で殺した祐成の儒蛸のやう平為第三度  
目の鎌倉二代頼家の命を蒙 浅間の洞へ入て神躰

の穴のぐをあふ天下よ其名を知らし 四郎  
忠常不二の山中附の能男あり

七番弟 船工

新田義貞公をむり 話の貉の舟へ乗てこんごめふ  
あひ小お糸あろし 多かる川城のせと昔唄あろし  
ひへがれて寄との縁語るる 一舫工も松右工門  
の如く船で妻子の養ひあろし 逆艦の由縁へ少し  
も知らずし 此をこそ家業の事あろし 逆鋤いつ  
の收成也し



八番兄 地藏尊

天明年中百鬼夜行

あやし哉  
えまゐる  
ぢぢうへ  
六ろの  
緒化れ  
文字を



「此作君もいふ画ごころ  
とてあれと今のおまけを  
つあふまるとかあんなまの  
ぢぢう化みあひ  
か月か

あふせーかも 定磨

弟 螻蛄

同集

あふ  
時六  
女良  
とま  
あひて  
とらも乃  
いとくと人を



「四天王のやみりもごまんの  
四ッ目ごらうへてはれもしやうが  
こ目のおれと退治ま  
とふたぬる  
仕死か

かけふる殺 真顔



3 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1

抄

八番兄 地藏尊

炮烙地蔵の火宅を示したまひ鹽嘗ぢぢうの辛き世  
の衆生とさくつん御哲願より拍子木地藏と番太  
郎と見まはせ鉄棒に似せ錫杖に持錢塚ぢぢうの  
賽錢の積るとも因果と縛らまはるの流名迄  
宮地藏の裏長家ある便宜屋へ出る男が住彼  
廓近き箕輪の辺に北背向の地ぢうと六丁ト客人の  
禁句とやぢうさん

八番弟 蟻

蜘蛛舞の昔の輕業めして今も助の興昇るそれ  
へ蟻蛸の高きとつりて是の壁錢の低きを走る世を  
あまぐの得手勝るへ蠅虻と侘蜘蛛抑蜘蛛の徳するや  
黄帝は是より依船城造吉備公のまが為子野馬  
臺を讀衣通姫の歌よ詠ま棚機乃夜のトとち  
てら小女良蜘蛛の名に優きもより又葛城の年を  
経て多田の館に妖怪を為まへ土蜘蛛の名の心と  
性ろし唯あれが禁物とまはる神夏機姫の銚先と  
頼光朝臣が太刀をせりあん



店たなから  
 落おちた  
 笈あし  
 題  
 五字  
 弟ケイ紙シ屑クセ拾シ  
 氣キノ毒ドク  
 千セン萬マン



犬がほそくさ  
 の乾たがらぬの  
 きふ上下の  
 るのはれほど  
 こるまわいてまへ  
 かまのいささつと  
 ちのさつと

九番兄  
 初平仙人  
 仙人を  
 天物  
 名を  
 撰成  
 花  
 六樹園



ひつと  
 えんもあらうが  
 赤のたぬ







九番兄 初平仙人

漢の初平が杖をのりて鞭て石を忽羊とするは  
浅草の老爺手を鳴せ茶釜へ則狸とかる石  
が羊れたぬきが金う夫の仙術あるは銭ありとん  
たり削り替つたを解あり

九番弟 紙屑拾

箏笠の皮破てかきろむらひ障る形風を志  
のぐもぐも昔の藤屋伊左衛門でも放蕩が止され  
は忽ふある次母とする事あり一家親類がとるは様

で他人の吉田屋喜丸傍門へ猶さう愛相を盡ま  
贅と氣根の一盛り七百貫目此紙祝儀むら小時の  
役あるたきと牽頭末社よと名あまし一紙今更なり  
を後悔と跡の祭禮とる前表れむらの衣を脱  
のそつ木綿帯へ龍のまよはけ居たけ日和とよる  
あんど雨も多今日ハ為事平出るは花を嵐乃  
腮をや釣さん栄花の一睡朝迎ひ覺身の苦ハ生  
涯小及ま人々必慎そそ不忠不孝ハ芥塚へ犯惱の  
犬一吼らる事あり



十番  
兄鬼童丸

申くあ我

似その

兄弟

牛純尻



ア、牛ガ  
かぞて  
さるけが  
まろ  
るぞと  
きんき  
丸も  
あんを  
ひり  
つり  
と  
と

第  
旅神楽

浄瑠璃附

あくま先

いんさんよ

所厄をひまじヨ

やくおと



悪魔とやら  
あまひさまの  
けなめをたたり

ア、くま  
人のころみ  
作共  
おれを  
ゆきじの  
だ、ホ  
つやア  
あ、外の  
あまひさま  
よまのよ  
れども





十番 兄 鬼童丸

源氏のがき大將頼光さまがかくもえほを為て搥び  
去時鬼童丸を仲間入に市原野で牛の皮を  
かぶり、フウよ、フーとひけとむ。四天王も保昌も  
みふれ光ふさぐー出せと鬼童丸乃隠所が  
志を秘し、いさうちきて肝積城發し、みま  
傳つて見ほけいぐー今度なきさう丸城鬼小  
為たり、あかひ成し所をアまは是も大江山を  
酒顛童子が徒あるべし。

十番 弟 旅神楽

中村重助が富本の鞍馬獅々曰大晦日も元日も  
股引がけに旅神楽云々彼天台の石橋より渡り  
る海にさせ業火天照神をも賣べし自太鼓を  
撃つ助郷の馬子等しく鉄將曹水獅々の有  
様を年あ丁度あひの十六庄屋が嫁の粧み似  
たり。髪あらしめを身もろくびと日もろれ近死病  
をのこ木賃泊の獅々の坐す著損料布團  
の洞入をやせん。



兄弟の左右の手也との後漢書の詔母弟母兄を自腹と日本  
 紀のよまれば何れ姉や妹やの道成寺に文句よまれば似たり  
 花首蒲杜若の白石の物六つありて兄公の知れしもの殿の  
 稚も知れ紋切形弟子に疳癩持の曾我狂言の五郎が中似  
 の夫婦とむむらうの諺をよむと友とまるとの呂氏春秋の記されり  
 其他のこれ給兄弟の他人の京傳の初始められて世に行つて久し  
 柳下亭に兄公を遺れると拾ひ弟ふにこれのれ小禿筆をかませて此  
 羊張のうめ草とまと呼鳴文才に妙なる哉庄屋の兄新田の舎弟も  
 いろ佳奥のうづらへき

三亭春馬記

作者

柳下亭種員



画工

一勇齋國芳



滑稽繪姿合初篇 出版

二篇 近刻

浅草雷神門内

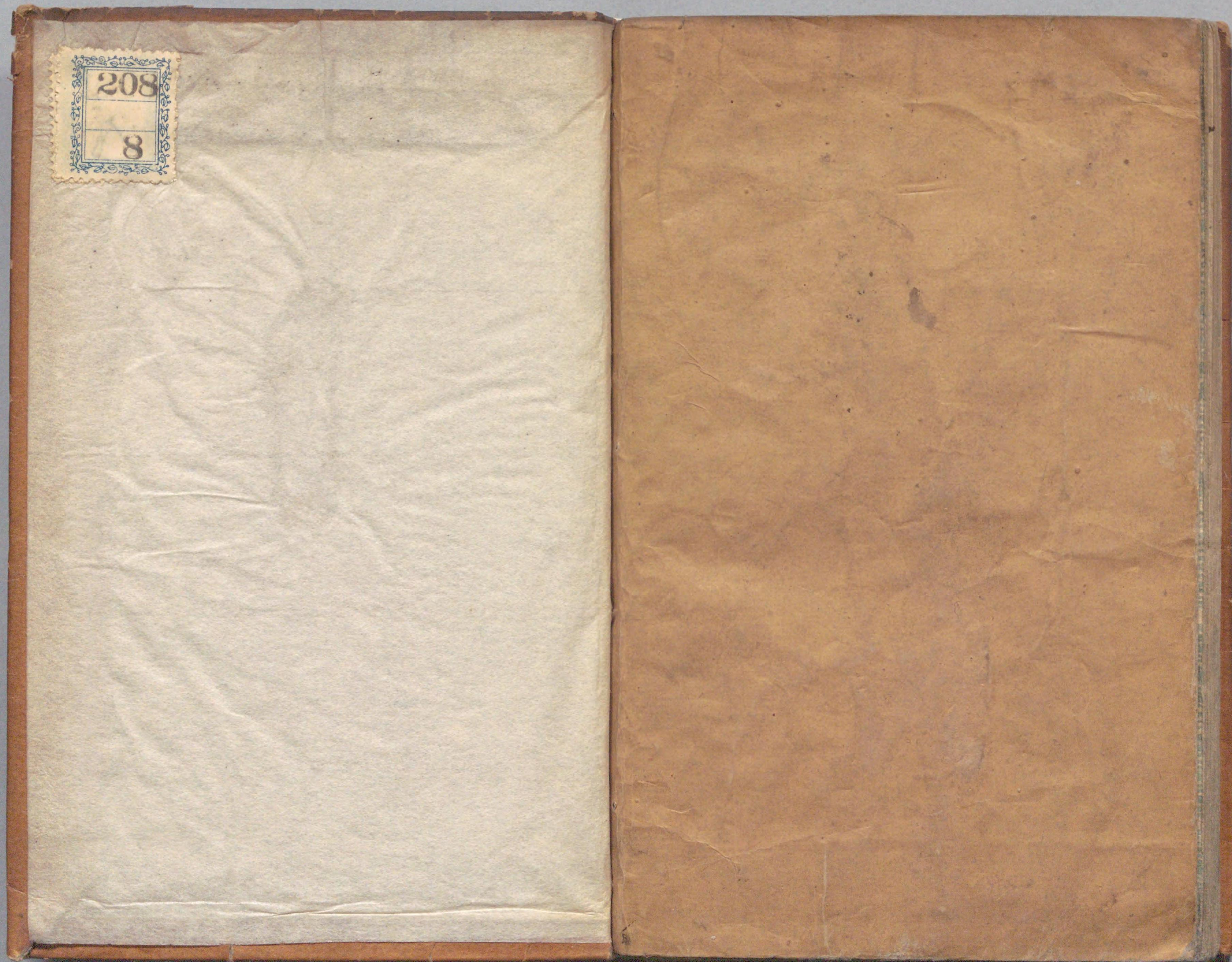
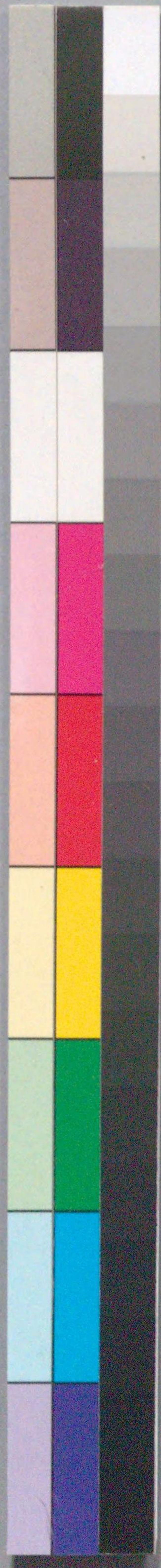
版元 耕書堂 葛屋重三郎



208  
8







国立国会図書館 滑稽絵姿合 208-8

ガラス使用







国立国会図書館 滑稽絵姿合 208-8



ガラス使用

